

## 看護学生が介護保険施設内で行う入所者疑似体験学習の学び — 疑似体験レポートの内容分析を通して —

鈴木陽子, 浅野祐子, 関千代子

つくば国際大学医療保健学部看護学科

**【要 旨】** 本研究の目的は、看護学生が身体可動性障害のある高齢者を理解するために、介護保険施設内で行う入所者疑似体験学習の学びの内容を明らかにすることである。看護学生 48 名を対象に、介護保険施設内で行った「入所者疑似体験学習」について、学生のレポートを分析した結果、以下の学びが得られた。身体可動性障害のある高齢者の理解としては、日常生活動作時の不自由さ、自由に動けないことによるネガティブな感情や身体の痛み、人との交流により生じた感情や感覚、紙パンツ着用の体験による気づきが得られた。また、援助のあり方としては、建物の設備や構造と環境整備、高齢者看護の基本的態度、具体的な援助方法についても気づくことができていた。

以上のことから、学生が介護保険施設内で行う入所者疑似体験学習は、動作困難な高齢者の立場からみた心身状態を理解する上で効果的であるばかりでなく、社会的側面を学ぶ上でも役立つことが示唆された。

**キーワード：** 看護学生, 老年看護学, 臨地実習, 介護保険施設, 疑似体験学習

### I. 序論

日本の高齢化率は 2017 年に 27.7 % となり、65 歳以上の者のいる世帯は全世帯の 48.4 % を占めている。しかし、単独世帯と夫婦のみ世帯がその過半数を超え、三世代世帯は 30 年前の約 45 % から 11 % にまで減少した (内閣府 高齢社会白書, 2018)。そのため、高齢者との接触が少ない家族形態をもつ看護学生は、加齢に

よる生理的な変化を生活の中で自然に気づいたり、理解したりすることが難しくなっている。このことから老年看護学教育において、実際に近い状況下における教育技法であるシミュレーションの重要性は増大している (小川と工藤, 2003) といえる。

シミュレーション教育 (simulation-based education) は、学習者の知識と技術の統合により実践力を強化するとして、医療者教育でも重要視されている (阿部, 2016)。看護教育では、医療シミュレータを活用したトレーニングやモデル人形を使用した日常生活援助の練習、ロールプレイング、妊婦ジャケット装着による疑似体験など、さまざまな状況に対して幅広く行われている。

老年看護学におけるシミュレーション教育

連絡責任者：鈴木陽子

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋 6-8-33

つくば国際大学医療保健学部看護学科

TEL: 029-826-6622

FAX: 029-826-6776

E-mail: yo-suzuki@tius.ac.jp

は、高齢者疑似体験が多数を占め（小川と工藤，2003）、そのほとんどが学内で行われている。樋口らは、2002年～2011年に発表された国内における看護学生の高齢者理解に関する研究の動向を分析し、「疑似体験学習における高齢者理解への効果」に分類された研究が全体の22.2%と最も多く、高齢者の特徴を理解する教育方法として採用され、多様な効果が示されたことを報告している（樋口他，2013）。橋本らは、介護者役の学生の学びから、高齢者疑似体験が介護者の立場を理解するための学習方法としても活用できると述べている（橋本他，2002）。

中谷らは高齢者疑似体験による健康教育が、小中学生にとっても効果的な教育方法であると述べている（中谷他，2002）。一方、高齢者疑似体験で身体機能の低下を経験させることが、高齢者は弱者であるという認識を強化し、高齢者をネガティブに捉えて自分とは違う異質な存在だと捉える危険があるとの指摘（勝真，2006）や、学内という制約された場での体験では、身体的・心理的側面に比べ、社会的側面の理解が少ないとの報告もある（竹内と横川，2000）。

そこで我々は、看護学生が高齢者の心身の特徴を理解するためには、より現実味のある教育環境が有効と考え、老年看護学実習において介護保険施設内で入所者疑似体験を行っている。今回、看護学生が介護保険施設内で行う入所者疑似体験学習の学びを明らかにすることを目的に、疑似体験レポートを質的に分析した。

## II. 方法

### 1. 対象

2016年に老年看護学実習Iを履修した看護学生65名のうち、本研究に同意を得られた48名（73.8%）の課題レポート「疑似体験からの学びー感じたことや援助のあり方についてー」（以下「疑似体験レポート」という）を対象とした。

## 2. 入所者疑似体験の方法および分析方法

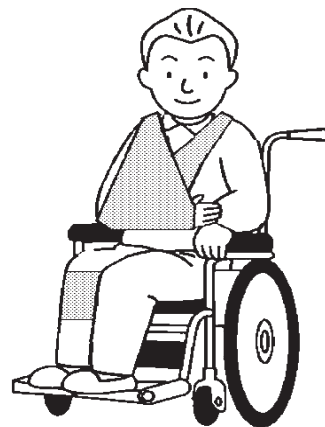
### 1) 老年看護学実習Iの概要

実習目的は、介護保険施設における高齢者への援助および、施設の理念を踏まえ医療・福祉の実際を知ると共に、看護職や他職種の役割を学ぶことである。施設内実習は3日間、介護老人保健施設と特別養護老人ホーム計4施設で行う。施設実習前日には学内でユマニチュード（本田他，2014）に関する学習をしている。実習は受け持ち患者制を取らず、入所者とのコミュニケーションを主とし、日常生活援助技術を見学および実施する。入所者疑似体験は、施設実習2日目・3日目の一部で行う。体験内容は疑似体験レポートとしてまとめ、実習後に提出する。なお、学生は実習前に老年看護学概論の講義で、老年期の特徴と老年看護の理念、加齢に伴う心身社会的変化を履修している。

### 2) 入所者疑似体験の設定とスケジュール

#### ①疑似体験高齢者の身体的状況（図1）

- ・不全片麻痺（利き側）と構音障害がある要介護3の高齢者（75歳）である。
- ・歩行は2、3歩可能である。
- ・車椅子で生活している。
- ・自発的な発語はないが、声をかけられれば簡単な会話は可能である。
- ・失禁があり、パンツ式紙おむつ（以下「紙パンツ」という）を装着している。



- ・麻痺側上肢は三角巾で固定する
- ・麻痺側下肢はテープでマーキングする

図1 入所者疑似体験完成図

## ②疑似体験時間とスケジュール（表1）



疑似体験時間は90分で、学生は施設実習2日目・3日目の2日間に分けて疑似体験者と介助者役の両方を体験する。入所者疑似体験項目は、車椅子に座りデイルームで入所者のテーブル

ルに同席、入所者や環境などの観察、車椅子の自操、排泄動作、食事動作である。介助者役の体験項目は、車椅子の自操・排泄動作・食事動作の介助である。表2は、実際に行ったスケジュールの一部抜粋である。

表1 入所者疑似体験項目

<ul style="list-style-type: none"> <li>・車椅子に座り、デイルームで入所者のテーブルに同席する</li> <li>・車椅子を自操する</li> <li>・排泄動作： トイレへの車椅子移動、便座に移乗する 尿便意の有無に関係なく、トイレで一連の排泄動作を実行する 介助者役は、トイレの外で待機し、所要時間を計測する 紙パンツをはずす際に、排尿を任意で試みる</li> <li>・食事動作： 弁当を箸やフォーク、スプーンを使用して食べる</li> <li>・入所者や環境などを観察し、高齢者の療養生活の場について考える</li> <li>・自身が体験している様々な感覚について認識し、高齢者ケアのあり方について考える</li> </ul>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

表2 施設実習スケジュール 例

施設実習	実習内容				
1日目 (火)	学生集合 行動計画発表 施設オリエンテーション 専門職ミニレクチャー 生活行動援助 学生カンファレンス				
2日目 (水)	学生集合				
	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th style="width: 50%;">A (疑似体験者)</th> <th style="width: 50%;">B (介助者役)</th> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 入所者疑似体験(90分) (車椅子自操、トイレ移乗、食事など)</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>生活行動援助</li> <li>看護師業務の見学・一部実施</li> <li>■ 疑似体験者の対応</li> </ul> </td> </tr> </table>	A (疑似体験者)	B (介助者役)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 入所者疑似体験(90分) (車椅子自操、トイレ移乗、食事など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活行動援助</li> <li>看護師業務の見学・一部実施</li> <li>■ 疑似体験者の対応</li> </ul>
A (疑似体験者)	B (介助者役)				
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 入所者疑似体験(90分) (車椅子自操、トイレ移乗、食事など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活行動援助</li> <li>看護師業務の見学・一部実施</li> <li>■ 疑似体験者の対応</li> </ul>				
					
学生カンファレンス					
3日目 (木)	学生集合				
	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th style="width: 50%;">A (介助者役)</th> <th style="width: 50%;">B (疑似体験者)</th> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>生活行動援助</li> <li>看護師業務の見学・一部実施</li> <li>■ 疑似体験者の対応</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 入所者疑似体験(90分) (車椅子自操、トイレ移乗、食事など)</li> </ul> </td> </tr> </table>	A (介助者役)	B (疑似体験者)	<ul style="list-style-type: none"> <li>生活行動援助</li> <li>看護師業務の見学・一部実施</li> <li>■ 疑似体験者の対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 入所者疑似体験(90分) (車椅子自操、トイレ移乗、食事など)</li> </ul>
A (介助者役)	B (疑似体験者)				
<ul style="list-style-type: none"> <li>生活行動援助</li> <li>看護師業務の見学・一部実施</li> <li>■ 疑似体験者の対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 入所者疑似体験(90分) (車椅子自操、トイレ移乗、食事など)</li> </ul>				
					
学生カンファレンス					

### ③学生カンファレンス

学生は、「疑似体験者と介助者役それぞれの役割で感じたこと、高齢者の援助について考えたこと」をテーマにカンファレンスをする。

### 3) 分析方法

学生の疑似体験レポートから、「理解した、考えた、分かった、必要である」などの学びと思われる記述を1文単位で切り取りデータとした。1データが1内容となるよう、意味を損なわないように要約し、同じ内容の記述が複数文にある時には整理し1データとした。次に、それぞれのデータを意味のまとまりごとに分けコード化した。さらに、コードの共通性や差異性に注目し分類、整理、統合し、橋本ら(2002)の報告を参考にカテゴリー化した(谷津, 2015)。

### 3. 倫理的配慮

学生には、本実習の成績確定後に研究説明書を用い、研究の目的、方法について説明した。研究への参加は個人の自由意思によるものであること、同意後も撤回できること、研究不参加による不利益がないこと、研究データから個人が特定されないこと、データは研究目的以外には使用しないことを説明した。同意書の提出期限は1週間後とし、同意書の提出をもって同意とみなした。また、実習施設の所属長には文書で説明し、公表に際して同意を得ている。本研究はつくば国際大学倫理委員会から承認を得て実施した(承認番号：第29-7号)。

## Ⅲ. 結果

学生の疑似体験レポートから434件のコードが抽出された。内容を分析した結果、カテゴリーは身体可動性障害のある高齢者の理解と、身体可動性障害のある高齢者を対象とした援助のあり方に大別できた。

以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、コードは『 』、学生の代表的な記述例を「」で示した。

### 1. 身体可動性障害のある高齢者の理解】(223件)(表3)

身体可動性障害のある高齢者の理解は、日常生活動作時の不自由さ、自由に動けないことによるネガティブな感情や身体の痛み、人との交流により生じた感情や感覚、紙パンツ着用の体験による気づきで構成された。

#### 1) 《日常生活動作時の不自由さ》(79件)

日常生活動作時の不自由さは、『車椅子自操、移乗、排泄、食事など普段できていることが難しい』(51件)、『なにをすることも疲れる』(19件)、『なにをすることも時間がかかる』(9件)で構成された。

『車椅子自操、移乗、排泄、食事など普段できていることが難しい』の記述例は、「車椅子から便座までの移動やパンツを下ろして手を洗うまでの一連の動作がとても大変」「箸で摂取を試みるがおかすは滑ってしまってなかなか掴めず、箸も器用に持つことが出来ず、食事をするという行為が面倒になる」等だった。

『なにをすることも疲れる』の記述例は、「車椅子を自操してみると自分が思っていた以上に疲労感を感じた」「思うように手が動かないので食事をするだけでも疲れてしまい、食べることが面倒に思ってしまった」等だった。

『なにをすることも時間がかかる』の記述例は、「移動に時間がかかりすぎる、これではトイレに行きたいときには間に合わない」「一口を口に運ぶだけでも時間がかかり、食べたいという気持ちが無くなり栄養不足にもつながると感じた」等だった。

#### 2) 《自由に動けないことによるネガティブな感情や身体の痛み》(43件)

自由に動けないことによるネガティブな感情

表3 疑似体験からの学び—感じたことや援助のあり方について—

N=48 (総コード 434件)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
身体可動性障害のある高齢者の理解 (223件)	日常生活動作時の不自由さ (79件)	車椅子自操, 移乗, 食事, 排泄など普段できていることが難しい(51件)
		なにをするのも疲れる(19件)
		なにをするにも時間がかかる(9件)
		自由に動けないことによるネガティブな感情や身体の痛み(43件)
	自由に関心することによるネガティブな感情や身体の痛み(43件)	自由に動けない, 思い通りにできないことによる苛立ち(14件)
		背中や腰が痛くなる(12件)
		自由に動けないことによる転倒転落の不安や恐怖がある(9件)
		介助がなければ何もできずに悲しい(8件)
	人との交流により生じた感情や感覚(65件)	周囲に人がいても孤独感がある(22件)
		入所者や職員に声をかけられ, 話を聞いてもらえるとうれしい(14件)
		上から見下ろされる威圧感や見えないうちから話しかけられる恐怖感がある(12件)
		一人でいると退屈, 時間が長く感じる(9件)
		職員が忙しそうなど, 周囲が気になり声がかけにくい(8件)
	紙パンツ着用の体験による気づき(36件)	紙パンツを履いている違和感や抵抗感, 安心感がある(30件)
紙パンツを履いていることを周囲に知られてしまう不安や羞恥心がある(6件)		
身体可動性障害のある高齢者を対象にした援助のあり方 (211件)	建物の設備・構造と環境整備(14件)	トイレの便座や手すりは使いやすいように設置されている(10件)
		廊下には障害物を置かない(4件)
	高齢者看護の基本的態度(91件)	相手のペースに合わせる(23件)
		相手の目線に合わせる(21件)
		すべて援助するのではなく, できない部分に対して援助をする(18件)
		自立をうながす(12件)
		相手の気持ちによりそう(9件)
		観察する(4件)
		多職種で連携する(4件)
		援助方法(106件)
	転倒予防や苦痛の緩和など安全安楽のための方法(22件)	
	タッチング, 声かけによるコミュニケーションの方法(21件)	
	リハビリテーションやレクリエーションにより, 残存機能を維持する方法(18件)	
	紙パンツを履いていても, トイレで排泄を促す方法(14件)	
排泄後の迅速な紙パンツ交換や陰部洗浄(7件)		

や身体の痛みは、『自由に動けない、思い通りにできないことによる苛立ち』（14件）『背中や腰が痛くなる』（12件）、『自由に動けないことによる転倒転落の不安や恐怖がある』（9件）、『介助がなければ何もできずに悲しい』（8件）で構成された。

『自由に動けない、思い通りにできないことによる苛立ち』の記述例は、「思い通りにできずイライラする」「自分が思っている以上に身体が動かない状態は辛く、思うようにできないことに喪失感や焦りという感情になった」等だった。

『背中や腰が痛くなる』の記述例は、「常に座っていることにより、背中や腰が痛くなった」であった。

『自由に動けないことによる転倒転落の不安や恐怖がある』の記述例は、「移動するのもズボンの上げ下ろしも立ちながら行わなくてはいけないので、不安定で転倒するかもしれないと恐怖を感じた」「車椅子から便座に移乗するときは、1人では危険であると感じた」等だった。

『介助がなければ何もできずに悲しい』の記述例は、「介助してくれる人がいなければ自分は生きていけないのだと感じて、悲しくなった」「自分がこんな体になって何もできない自分が情けないと感じてしまうときがあった」等だった。

### 3) 《人との交流により生じた感情や感覚》(65件)

人との交流により生じた感情や感覚は、『周囲に人がいても孤独感がある』（22件）、『入所者や職員に声をかけられ、話を聞いてもらえるとうれしい』（14件）、『上から見下ろされる威圧感や見えないところから話しかけられる恐怖感がある』（12件）、『一人でいると退屈、時間が長く感じる』（9件）、『職員が忙しそうなど、周囲が気になり声がかけにくい』（8件）で構成された。

『周囲に人がいても孤独感がある』の記述例は、「利用者さんから置いてかれてしまい、それによって孤独を感じた」「周りにも人はいるが

自分だけが孤立している感覚があり落ち着かなかった」「利用者が楽しそうに体操しているのを見、うらやましく感じた」等だった。

『入所者や職員に声をかけられ、話を聞いてもらえるとうれしい』の記述例は、「介護士さんが話しかけてくれたときはその明るい声と笑顔に癒され、心がポツと温かくなった」「声をかけてくれる利用者がいた。利用者同士のコミュニケーションは社会的機能が低下しない為にも重要であり、他の人と交流することは大切なことだと感じた」等だった。

『上から見下ろされる威圧感や見えないところから話しかえられることの恐怖感がある』の記述例は、「自操時にいきなり後ろから押されると驚くし、恐怖を抱く」「立っている人と会話をすると見下ろされていて威圧感や恐怖感を感じた」等だった。

『一人でいると退屈、時間が長く感じる』の記述例は、「一人で何もすることがなく、時間がとても長く感じた」等だった。

『職員が忙しそうなど、周囲が気になり声がかけにくい』の記述例は、「介護士の方が、誰かのケアをしていたり準備をしていたりと忙しそうだったため、話しかけるタイミングをつかむことが難しい」「他の方の相手をしているのを見たときは、何かお願いしたくても話しかけにくい感じがした」等だった。

### 4) 《紙パンツ着用の体験による気づき》(36件)

紙パンツ着用の体験による気づきは、『紙パンツを履いている違和感や抵抗感、安心感がある』（30件）、『紙パンツを履いていることを周囲に知られてしまう不安や羞恥心がある』（6件）で構成された。

『紙パンツを履いている違和感や抵抗感、安心感がある』の記述例は、「紙パンツを着けることに対しての抵抗が強く、着けた後も不快感があった」「紙パンツを履いて移動することは普段より動きづらく動作が制限され、パンツ内が蒸れるような感じがして不快だった」「紙パンツをつけていることでいつでも排泄出来るという

安心感があった」等だった。

『紙パンツを履いていることを周囲に知られてしまう不安や羞恥心がある』の記述例は、「紙パンツを履いていることが周りに知られるかもしれないと羞恥心を感じた」「紙パンツがカサカサと音がするので周りに音が聞こえていないかと不安になった」等だった。

## 2. 【身体可動性障害のある高齢者を対象とした援助のあり方】(211件)(表3)

身体可動性障害のある高齢者を対象とした援助のあり方は、建物の設備・構造と環境整備、高齢者看護の基本的態度、援助方法の3つのサブカテゴリーで構成された。

### 1) 《建物の設備・構造と環境整備》(14件)

建物の設備・構造と環境整備は、『トイレの便座や手すりは使いやすいように設置されている』(10件)、『廊下には障害物を置かない』(4件)で構成された。

『トイレの便座や手すりは使いやすいように設置されている』の記述例は、「車いすが入りやすいようにドアが大きく作られている、個室内で車いすの方向転換や乗り降りがしやすいように広がっている」「手すりは必要なものであることがわかった」等だった。

『廊下には障害物を置かない』の記述例は、「視野が狭まり周囲の状況を認識しづらい。転倒転落のリスクを避けるためにも物品などの配置には注意が大切」等だった。

### 2) 《高齢者看護の基本的態度》(91件)

高齢者看護の基本的態度は、『相手のペースに合わせる』(23件)、『相手の目線に合わせる』(21件)、『すべて援助するのではなく、できない部分に対して援助をする』(18件)、『自立をうながす』(12件)、『相手の気持ちによりそう』(9件)、『観察する』(4件)、『多職種で連携する』(4件)で構成された。

『相手のペースに合わせる』の記述例は、「そ

の人に合った援助をする」「入所者自身ができることは見守ることも重要である」、相手の目線に合わせるは、「しっかりと目を合わせる」等だった。

『すべて援助するのではなく、できない部分に対して援助をする』の記述例は、「状況や利用者の体の状態に合わせて、その人にあった援助方法を考えていくことが大切だと思った」「すべて援助してしまうと今までできていたことまでできなくなってしまう」等だった。

『自立をうながす』の記述例は、「介助を必要最小限にとどめることによって、利用者さん本人の自立度を促し、再び自立して生活できるようにしていく」等だった。

『相手の気持ちによりそう』の記述例は、「どんな気持ちで生活しているのか、何を伝えたいのか、医療者側に望むことは何なのか考えながら援助する」「高齢者それぞれの生き方を否定せず、受け入れ、その人を理解しようとする」等だった。

『観察する』の記述例は、「観察し、少しのサインも見逃さないように常に注意をしていなければならないと思った」等だった。

『多職種で連携する』の記述例は、「高齢者の生活の質を向上させるには看護師だけでなく、医師や介護士、介護支援専門員や理学療法士など多様な専門職の連携が必須である」等だった。

### 3) 《援助方法》(106件)

援助方法は、『自助具の利用や道具の工夫』(24件)、『転倒予防や苦痛の緩和など安全安楽のための方法』(22件)、『タッチング、声かけによるコミュニケーションの方法』(21件)、『リハビリテーションやレクリエーションにより、残存機能を維持する方法』(18件)、『紙パンツを履いていても、トイレで排泄を促す方法』(14件)、『排泄後の迅速な紙パンツ交換や陰部洗浄』(7件)で構成された。

『自助具の利用や道具の工夫』の記述例は、「スプーンなどの自助具を使い食べやすくし、

食べ物や滑り落ちない工夫や、お皿などを食べやすい向きに変えるなどの工夫を行うと自分でおいしく楽しく食べることができる」[「ラップの芯を車イスのストッパーに付けると、姿勢を前かがみにしなくても少しの力でレバーを押したり引いたりすることが出来る」]等だった。

『転倒予防や苦痛の緩和など安全安楽のための方法』の記述例は、「転ばないように身体を支えてあげたり、声をかけたり、車椅子のストッパーがかかっているかを確認する」[「部屋や角から出てくる利用者がいないか確認しながら見守ることが大切」]「とろみをつけると（中略）、液体と異なり、ゆっくりと口の中に入ってくるので誤嚥のリスクを減らせる」[「一日中同一体位でいる患者には、体位変換をしたりして、患者が苦痛に感じないように援助したい」]等だった。

『タッチング、声かけによるコミュニケーションの方法』の記述例は、「声をかける際には、高齢者の視界の中に遠くから入り徐々に近づいていく、相手の視線と自分の目線を合わせて、軽く触れながらコミュニケーションをとる」[「スタッフは言語機能が低下した方でもコミュニケーションできるようにジェスチャーを交え、タッチングをし、表情が見えるよう接していた」]等だった。

『リハビリテーションやレクリエーションにより、残存機能を維持する方法』の記述例は、「嚥下機能を維持させる必要があり、嚥下体操をするなどの工夫は大切だと分かった」[「健側のリハビリは、筋肉をつけ自分の残存機能を生かすために必要なことだと思った」]「自操するだけでも残存機能の維持につながる良いリハビリだと考えた」]等だった。

『紙パンツを履いていても、トイレで排泄を促す方法』の記述例は、「高齢者でトイレの失敗は精神的に大きな負担となるので、時間を決めてトイレ誘導をする」]等だった。

『排泄後の迅速な紙パンツ交換や陰部洗浄』の記述例は、「失禁してしまったら素早く紙パンツを交換する」[「陰部洗浄を行うときに臀部の

方まで洗う事が大切」]等だった。

#### IV. 考察

本研究は、看護学科2年生が身体可動性障害のある入所者疑似体験を行い、感じたことや援助のあり方について書いたレポートを分析した。その結果、入所者と介助者という2つの視点で理解や気づきが示された。以下に、それぞれについて考察する。

##### 1. 身体可動性障害のある高齢者の理解

学生は動作が制限される疑似体験を通し、日常生活の不便さが身体的、心理的、社会的に影響を及ぼすことをとらえていた。排泄や食事動作の難しさや疲れ、時間がかかるなどの気づきは身体的側面の理解といえる。ほとんどの学生が、車椅子の自操、排泄動作、食事動作の全ての体験項目で困難や疲労を実感していた。これは、先行研究である、岩鶴ら(2000)の報告と同様で、学生は今まで体験したことのない身体感覚を通して、高齢者の身体的特徴をとらえ、生活するうえでの不自由さや苦痛に気づいた。さらに、本研究では、学生は動作の不自由さが失禁や食思不振、栄養不足のリスク要因になることを、疑似体験を通して学んだ。

自由に動けないことは、ネガティブな感情や身体の痛みが発生要因となっていた。先行研究と同様、学生は老化に伴う身体的変化が精神面に大きく影響していることを実感している(古市他、2011)。それに加え、疑似体験者は、90分の車椅子体験を通し、動けずにじっとしていることによって苛立ちや不安、悲しみといったネガティブな感情や痛みが出現することを実感していた。これは、身体可動性障害のある高齢者の動作に伴う不自由さの理解ばかりでなく、動かないでいることも、身体的精神的な苦痛を引き起こすという理解に発展していったと考えられる。



人との交流により生じた感情や感覚の発生要因は、学生が自由に動けない設定で入所者のテーブルに同席したことにあると考える。自ら他者に話しかけないという設定から、学生は孤独を感じ、楽しそうに交流している他者をうらやみ、さらに、職員への声掛けをためらう気持ちを実感していた。同時に、学生は職員の明るい声と笑顔に癒されたと感じ、他者と関わる時の具体的な接し方についても、学ぶ機会になっていた。これらは、学生が入所者や職員との交流から得た感情であり、社会的側面の理解と考える。施設内において入所者疑似体験をすることは、学生が他者へ感情移入しやすくなり、このことが入所者に同化した感情や感覚を生み、社会的側面の理解に発展していったと考える。

紙パンツ着用の体験による気づきは、身体的・心理的・社会的な3側面から成り立っていた。学生は、違和感や安心感など紙パンツを履いたことによる単なる感想にととまらず、不安や羞恥心など周囲の人を意識することで生じる感覚にも気づくことができていた。学生のほとんどが、紙パンツに関して記述しており、学生にとって紙パンツを履くことが印象深い体験だったといえる。

## 2. 身体可動性障害のある高齢者を対象とした援助のあり方

学生は入所者疑似体験を通して、高齢者看護における基本的態度を学んでいた。ケアの対象者に示す共感的態度や自立を促す働きかけ、見守る姿勢は、老年看護に限らず、すべての看護に共通した内容で、先行研究（岩鶴他、2000；橋本他、2002；川崎と千葉、2004；古市他、2011）と類似している。また、老年看護学概論で学んだ高齢者看護の基本（堀内他、2016）と一致する内容が多かった。

学生は援助のあり方の基本として次のような学びも得ていた。介助者が相手の目線に合わせ、気持ちに寄り添い共感しようとする態度は、高齢者の自尊感情を大切にしたいと思う態

度の現れといえる。また、相手のペースに合わせた援助の重要性は、自立している部分とそうでない部分を見極め、潜在能力を引き出そうとする、高齢者看護に必要とされる基本的な態度といえる。

高齢者の看護は疾病や障害に加え生理的老化を意識したケアが必要である。学生の記述にある「観察する」は、一般的に高齢者では非典型的な症状が現れやすいことを考えると、早期発見や事故防止につながる高齢者看護の特徴を意識した看護の基本といえる。さらに、多職種連携についての記述からは、看護職や医師、理学療法士、介護職員等の業務を疑似体験中に学生が見学できる環境にあったことが、チームアプローチの必要性の理解につながったと考えられる。

学生は高齢者を援助する際の具体的な工夫や援助方法について学んでいた。環境づくりやコミュニケーションの方法、危険回避の方法などは先行研究（橋本他、2002；古市他、2011）と類似している。しかし、本研究では、援助の工夫や利用者との接し方、リハビリテーションの意義など、より具体的な記述が多くみられた。これは、学生が疑似体験者・介助者役を体験しながら、職員の援助場面や利用者の反応を実際に観察できる環境にいたことも要因として考えられる。

建物の設備や構造と環境整備に関する気づきは、学生が身体可動性障害のある高齢者を想定した疑似体験を通して得たものとする。立位や歩行が不安定な状況下で行った排泄動作は、トイレ内の手すりの利用や物品の配置など具体的な援助方法の理解に結びついたと考える。

高齢者に声をかける時の視線の合わせ方やタッチングなどのコミュニケーション技術は、ユマニチュード（本田他、2014）の4つの柱のうち、見る、話す、触れる、に一致し、実習直前に行った講義や演習の内容が実習に有効であったと評価できる。

トイレ誘導や陰部洗浄など具体的な排泄援助の必要性は、学生が紙パンツを履く体験からの

理解の広がりである。学生にとって紙パンツを履くことが印象深い体験だったため、体験と既存の知識が結びつきやすかったと考える。

### 3. 介護保険施設内で行う入所者疑似体験の学びの特徴

本研究の特徴は、高齢者の社会的側面の理解ができた点にあるといえる。竹内と横川(2000)は、学内での体験にとどまらず、社会の場での体験学習を加えることにより、高齢者の社会的側面の理解がより育てられるだろうと述べている。本研究は、その点を裏付けることができたと考えられる。

つまり、介護保険施設内での入所者疑似体験学習プログラムを、学生が入所者の立場に同化しやすいように環境設定したことが、社会的側面の理解につながったといえる。社会的側面をよりよく理解するためには、本研究の結果が示すように、可能な限り現実の社会環境の中で、高齢者との関りを体験することが重要と考える。

### 4. 研究の限界と課題

本研究では、学生の疑似体験レポートを分析の対象とした。しかし、学生が学んだことの全てを記述しているとは限らない。また、学生は疑似的な状況で自分が感じた身体的・心理的・社会的側面の理解を元に、必要な援助を考えている。しかし、実際の入所者がどのような心理的・社会的背景があるかにより、同じ状況でも感じることは異なり、援助のあり方も変わってくるといえ、これが疑似体験学習の限界である。学生が高齢者と関わる時には、自分自身の体験のみを頼りにせず、高齢者にとっての援助を考えるように促す必要がある。

今後の課題は、より正確な学生の学びを知るために疑似体験レポートを体験別に記述するなど記述内容を変更すること、今回の学びが今後の学習や実習にどのように影響するのか研究を

重ねること、さらには、実習や演習での学びを次の実習で応用するための教育方法を検討することである。

### 謝辞

本研究にご協力くださいました学生の皆様、実習でお世話になりました介護保険施設職員の皆様に心から感謝申し上げます。

### 参考文献

- 阿部幸恵(2016)医療におけるシミュレーション教育. 日本集中治療医学会雑誌. 23(1): 13-20.
- 岩鶴早苗、天津榮子、水田真由美(2000)老人看護学における学内演習の効果の検討—「Aging」「排泄体験」を通して—. 和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要. 3: 39-47.
- 小川妙子、工藤綾子(2003)老年看護学におけるシミュレーションに関する教育研究の分析—研究の現状と教育効果—. 順天堂医療短期大学紀要. 14: 34-43.
- 勝眞久美子(2006)「高齢者疑似体験で」体得する事柄の実態. 奈良文化女子短期大学紀要. 37: 149-154.
- 川崎彰子、千葉京子(2004)看護基礎教育における高齢者疑似体験の学習効果—小グループでの討議記録を質的に分析して—. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要. 17: 21-27.
- 竹内美由紀、横川絹恵(2000)体験学習による学習効果—高齢者疑似体験記録の内容分析を通して—. 香川県立医療短期大学紀要. 2: 107-114.
- 内閣府(2018)平成30年度版高齢社会白書. 日経印刷、東京、pp. 2-9
- 中谷久恵、光岡攝子、長田京子、阿部芳江(2002)小・中学生を対象にした高齢者疑似体験に

- よる健康教育の評価. 鳥根医科大学紀要. 25：11-15.
- 橋本文子、松下恭子、多田敏子（2002）看護学生を対象とした高齢者擬似体験学習の意義—高齢者および介護者体験からの学び—. 老年看護学 7(1): 95-102.
- 樋口友紀、福島昌子、竹渕由恵、小川妙子、狩野太郎（2013）看護基礎教育課程における看護学生の高齢者理解に関する研究の動向—2002年～2011年に発表された国内研究に焦点をあてて—. 群馬県立県民健康科学大学紀要. 8：89-101.
- 古市清美、高橋ゆかり、鹿村真理子、兎澤恵子（2011）早期体験演習における看護学生の老年看護に関する学び. 上武大学看護学部紀要. 6(2): 20-27.
- 堀内ふき、大渕律子、諏訪さゆり（2016）老年看護学①高齢者の健康と障害 第5版. メディカ出版、大阪、pp. 140-147.
- 本田美和子、イヴ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティ（2014）ユマニチュード入門. 医学書院、東京.
- 谷津裕子（2015）Start Up 質的看護研究 第2版. 学研メディカル秀潤社、東京. pp. 97-154.

## Report

# **A study from the simulation-based learning conducted by nursing students in long-term care facilities**

Yoko SUZUKI, Yuko ASANO, Chiyoko SEKI

Department of Nursing, Faculty of Medical and Health Sciences, Tsukuba International University

## **Abstract**

The purpose of this study is to use the contents of simulated experiences that nursing students perform in long-term care facilities to understand elderly people with mobility impairment. The method used was to analyze the report contents of 48 nursing students. Students understand elderly people with mobility impairment as experiencing inconvenient movement, negative emotions, and body pain, negative emotions and bodily pain due to their inability to move freely, and the experience of wearing paper pants. Students also noticed how carers are building equipment, structure, and the environment, and conveying basic attitudes to others toward the elderly, about the method of intervening.

These findings suggest that the learning from simulated experience that nursing students perform at long-term care facilities is effective not only to understand the mental and physical condition of the elderly with difficulty in the activities of daily living, but also to learn its social aspects.

**Keywords:** simulation-based learning, nursing students, gerontological nursing, long-term care facility, nursing practice